

令和5年度 江戸川区立篠崎第二小学校 学校関係者評価 最終評価報告書

学校教育目標	光る子 ～人間性と想像力を豊かに、心身たくましく～	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	○子供たちが明るく元気に学校生活を送れるように、自己肯定感を育み、認める・褒めることを基本とする教育を推進する学校 ○善悪を正しく判断して、思いやりをもって人と接し、困難にも諦めずやり抜くことができる児童 ○社会人、公務員としての自覚と認識をもち、指導力向上を図り、職務を遂行することのできる教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	<成果> ・学校として取り組んでいる内容に関して、80%以上の保護者が、指導に対して効果があると肯定的に捉えている。 <課題> ・全国学力調査での都の平均正答率に迫れるような基礎学力の定着 ・児童の体力向上、教職員の学習指導力の向上 ・学習用タブレット端末の積極的かつ効果的な活用		

教育委員会重点課題	<取組項目> ・評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価	次年度に向けた改善策	
				取組	成果			
学力の向上	<学力の向上> ・授業改善の推進、学習の基礎となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・各学期「江戸川つ子study week」を実施し、学習用タブレット端末を活用してライシードの算数教科を中心とした家庭学習に取り組ませる。また、タブレット端末は、学校においても各教科で効果的に活用し、個別最適な学びの助けとする。 ・各学期「東京ベーンシクル活用期間」を実施し、朝学習やフレキシブルタイム等で算数教科を中心として東京ベーンシクルに取り組ませる。期間終了後に診断テストに取り組ませ、学習内容の定着の確認をする。 ・補習教室（外部委託、学校独自）やライシード、東京ベーンシクル等を活用し、学習の基礎基本の定着を図る。5年生は、区の学力向上プロジェクトに参加し、年間をとして東京ベーンシクルに取り組む。 ・3年生以上で社会科と理科を中心とした教科担任制を実施し、教科指導の専門性を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各学級の90%以上の児童が、学習用タブレット端末を活用した家庭学習に取り組むことができる。 ・学校でのタブレット端末の活用を、第1～3学年は平均2日に1回以上、第4～6学年は平均1日1回以上とする。 ・東京ベーンシクル診断テストの誤答数の減少児童数を90%以上にする。5年生においては、誤答数の減少児童数を90%以上にする。 ・各ワークテストの知識技能のクラス平均を80%以上にする。 	A	B	<ul style="list-style-type: none"> ○各学級の90%以上の児童が、学習用タブレット端末を活用した家庭学習に取り組むことができた。また、1～3年生では2日に1回以上、4～6年生は1日1回以上学習用タブレット端末を活用することができた。 ○江戸川つ子study weekや東京ベーンシクル活用期間を繰り返し学習させたことにより、学力の定着につながり、教科担任制の取り組みは賛成である。 ○他校と比較して学力が低いことを不安に感じる。徹底的な基礎の反復学習や学習量などが足りないと、思う。ライシードに自主的に取り組む職員ができていない。 ▲教科担任制は、教員の専門性の向上につながり、それが児童の学力向上にも効果がある。一方、専門外の教科の担当となると負担が大きくなった。 ▲外部委託の補習を呼び掛けたい児童は、高学年になるほど参加率が低かった。 ▲単元によっては、ワークテストの知識技能の平均が80%に届かないものもあった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・外部委託の補習教室があることを知らなかった。 ・様々な学習への取り組みや補習は、基本の部分の取り組みの様子を保護者会等で紹介し、家庭でも取り組む様子を確認して貰った。 ・江戸川つ子study weekや東京ベーンシクル活用期間では、低学年においては正答率の低い単元・問題を共通の課題として取り組ませる。高学年においては個人で苦手とする単元・問題に取り組ませる。ライシードで取り組みの様子を教職員が把握し、必要に応じて児童に取り組ませる。 ・学校独自の補習では、学年間で相談し合い、基礎的・基本的な力を身に付けられるような内容で実施する。 ・教科担任制を実施しやすいような時間割を組み、確実に実施する。
	<読書科の更なる充実> ・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・読書科や各教科、総合的な学習の時間において「調べる」「まとめる」「発表する」学習活動を計画的に取り入れる。 ・第5学年を対象として、「江戸川つ子 読書科コンクール」に向けた作品作りに取り組む。 ・調べてまとめたことを発表し合う、学習の成果発表を行う。 ・調べる学習コンクールへの参加を児童に呼び掛ける。 ・区立図書館司書と連携を図りながら、学校図書館を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全学年が「調べる」「まとめる」「発表する」学習活動を通して、「調べる学習」のまとめ年間2作品以上作る。 ・第5学年全員が「江戸川つ子 読書科コンクール」に向けた作品作りに取り組む。 ・3学期に、発表する対象を定めた、学習の成果発表を行う。 ・全校児童の15%以上の児童が調べる学習コンクールに作品を出品する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○各コンクールへの参加呼び掛けにより、児童の意欲向上につながり、学校図書館活用の良い機会となった。 ○学習の成果発表を行うことにより、各学年が調べる「まとめる」「発表する」という探究的な活動に、相手意識をもって取り組むことができた。 ○一人一台の学習用タブレット端末により、インターネットで調べることがスタンダードとなりつつあり、図書資料から必要な資料を得ることが難しく感じる児童もいた。 ▲学校図書館の蔵書には限りがあり、必要な情報を得られないこともあった。 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・調べるきっかけとして、本を身近に感じる良い機会となっている。 ・学校図書館にはいろいろな活用方法があると思う。さらに広く広報してくれると良い。 ・地域の図書館（篠崎こども図書館）との団体貸し出しを利用して、児童の調べる活動に必要な本をそろえる。 ・学校図書館司書の来校日には、学習に使用する図書を選定してもらい、児童が利用しやすいようにする。 	
体力の向上	<運動意欲や基礎体力の向上> ・運動意欲の向上や健康の推進に向けた取組の実施・改善・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・本校オリジナルの準備運動「篠二エクササイズ」に全学年で取り組み、体力を向上させる。 ・毎週水曜日中休みのくぐくん水曜日を活用して、学級や学年で運動遊びに取り組む。 ・競技の専門家を招いた体育科の学習を計画して実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体力テストにおいて、4つ以上の項目で、江戸川区Tスコアを超える。（全学年のTスコア平均値） ・くぐくん水曜日時に、怪我や体調不良の児童を除く全員が学級や学年で設定した運動遊びに取り組む。 ・競技の専門家を招いた体育科の学習を実施する。 	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○くぐくん水曜日は校庭で体を動かす機会を与えること効果的であり、体調が優れない児童以外は運動遊びに取り組むことができた。 ○体力テストにおける6つの項目で江戸川区Tスコアを超えた。 ▲第4学年に元バレーボール選手を招いた授業を行ったが、それ以外の学年では実施できなかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の指が運動遊びを行ったり、トラブルがないように見守りたり対応したりする人がいるべきだと思う。 ・校庭で体を動かすことは非常に大切なので、運動遊びの機会は必要だと感じる。
	<特別支援教育の推進> ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副職交流、交流及び共同学習の実施・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・指導上配慮を要する児童の情報交換を毎週1回行う。 ・配慮を要する児童に対する対応等を、共有ファイルサーバーに保存し、全教職員がいつでも閲覧できるようにして、配慮を要する児童について全教職員に周知する。 ・特別支援教育に関するOJT研修を行い、ユニバーサルデザインに即した環境づくり、授業展開に努める。 ・学校レガシー2020として、セルビア共和国についての調べ学習や、同大使館との交流活動を実施する。（第5学年） 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭や児童相談所等の関係機関、スクールカウンセラーと連携を図りながら、不登校傾向にある児童の出席回数、教室に入れる頻度を増加させる。 ・巡回指導にかかる児童の個別指導計画、配慮を要する児童に対する共有シートを作成し、全教職員がその内容を周知し、児童一人一人に合った対応をする。 ・巡回指導教諭とスクールカウンセラーによるOJT研修を全2回実施し、配慮を要する児童への対応の仕方やユニバーサルデザインに即した環境づくり、授業展開を全教職員で実施する。 ・第5学年児童の90%がセルビア共和国への理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○毎週的生活指導連絡会において、配慮を要する児童の共有を学年ごとに行なった結果、互いの声掛けが増加し、配慮を要する児童への指導への充実につながった。 ○学校レガシー2020における取り組みにより、5年生を中心に、異文化理解が深まった。 ▲不登校傾向にある児童の登校数や、教室に入る機会はまだ横ばいであった。 	B	C	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮を要する児童への対応が不十分だと感じることがあった。 ・教職員の負担が増えないようにしてほしい。 ・取り組み自体を知らなかった。 	
子どもたちの健全育成	<子どもたちの健全育成に向けた取組> ・不登校対策の実施・充実 ・教育相談の強化 ・hyper-Q-Uの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・特別活動等で、「江戸川区子ども権利条例」の理解を図る。 ・確実スタンダードを活用し、校内におけるより良い生活習慣を確立させる。 ・週1回、全教職員参加の生活指導連絡会を実施する。 ・6月と1月に「Hyper Q-U」を実施し、学級の実態を把握し、より良い学級集団を形成する。 ・スクールソーシャルワーカーを有効に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・80%以上の児童が、学年の実態に応じて権利条例の内容を知り、守ろうとしている。 ・90%以上の児童が確実スタンダードを守る。 ・11月の「Hyper Q-U」実施時に、6月より学級満足度の児童の人数を増加させる。 ・全教職員がスクールソーシャルワーカーの支援内容を理解し、必要に応じて連携が取れるようにする。 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○Hyper Q-Uにおいて、各学級だけでなく、学校全体の児童の把握に立ち、学校全体と同じ方向に向けた指導を行なった。 ○確実スタンダードを守れている児童が各学級で90%以上いる。 ○11月の認知件数は昨年より微増であった。 ▲アンケートは保護者として大変参考になることもあるが、年2回では少なくも感じる。 ▲スクールソーシャルワーカーの支援を、必要な児童に活用できていない。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・SSWの支援内容を周知する機会を設定し、全教職員が効果的にSSWを活用できるようにする。 ・Hyper Q-Uの結果を学校全体で共有する時間を設定して疑問が残る。 ・トラブルの内容によっては、警察官の活用をお願いしたい。 ・確実スタンダードを本校の実態に合わせて見直していく。
	<自校（園）の取組の積極的な発信> ・学校（園）ホームページの充実等 ・学校（園）公開の実施・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・学校ホームページでは、校長日記や学校日記の更新頻度を高め、教育活動を地域・保護者に周知する機会を増やす。 ・学校公開では、各教科等の授業だけでなく、ゲストティーチャーを招いた活動も実施し計画して、様々な教育活動を地域・保護者に公開できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校ホームページにおける校長日記、もしくは学校日記の更新頻度を1日1回以上にする。 ・学校公開では、ゲストティーチャーを招いた活動を全学年で1回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校ホームページを定期的に更新できた。 ○学校公開では、全学年でゲストティーチャーを招いた授業を行うことができた。 	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊行事は、写真を小まめにアップしていたので、児童の様子が伝わりやすかった。 ・学校公開では、今後もゲストティーチャーを招いた授業を計画・実施し、様々な教育活動を保護者に公開していきたい。 	
地域に広く開かれた学校（園）の実現	<学校関係者評価の充実> ・教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・6月の職員会議において学校関係者評価の内容を周知し、10月の職員会議で中間評価を共有し合う。また、毎月末の夕会にも具体的な取り組みや成果指標を確認し合うことで、本校で設定した重点項目の達成を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・8項目中、6項目以上で自己評価の取組と成果をB基準以上にする。 ・8項目中、6項目以上で学校関係者評価をB以上とする。 	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○8項目中、6項目における自己評価（取組と成果）をB以上にすることができた。 ▲成果がAになる項目が少なかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者として感じたことを述べることでできる機会だと感じている。 ・アンケートであれば記名は必要ない。本音を書きつらぬ。
	<学校における働き方改革プラン> 学校における働き方改革プランに基づく取り組みの実施	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事を精選して、適切な授業時数・諸会議を設定する。 ・副校長補佐やSSSを積極的かつ効果的に活用する。 ・教科担任制の実施（3年生以上）により、授業の準備にかかる時間を減少させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1ヶ月の在任時間が正規の勤務時間から45時間を超えないかつ1年間定時外在任時間が360時間を超えない教職員の数を前年度より増加させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○SSSや副校長補佐との連携が深まり、在任時間が短くなる教職員が増えた。 ▲行事外にも、様々な活動があるが、それぞれの活動の見直しが必要でないものもあった。 	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の負担軽減のためにも、積極的に活用したほうが良い。 ・保護者、協力団体への協力要請も遠慮しないでほしい。 ・今年度中に休職等があり、他の教職員の負担が増えている気がする。 	